

"The Adventures of Huckleberry Finn" No.2

"It is the worst bad luck in the world to touch a snake-skin with hands."

Mark Twain

「ハックルベリー・フィンの冒険」No.2

「蛇のぬけがらを手でさわると、いちばんひどい禍を招くことになる」

マーク・トウェイン

著者が自ら説明しているように、この物語にはミズーリ地方の黒人の方言ほか、多くの方言が使われています。そこで上にあげたような、"worst bad luck" や "We knowed", "it 'us dis way" というような、文法に合わない表現がたくさんあって、外国人には多少読みにくいものの、雰囲気を感じ立てるのに役立っています。

また、そうした言葉とともに、当時広く信じられていたいわゆる迷信が、黒人のジムの口から次々と語られています。冒頭の蛇のぬけがらの話もその一つで、ハックが山で蛇のぬけがらを見つけて掴んだときにジムがいさめたものです。運命を予告するものとしてこの後も繰り返し出てきます。

さて、話をもとに戻して、前回のミシシッピの川下りを追うことにしましょう。実は川下りを始めてすぐ、蛇の関わる事件が起こりました。岸辺で休んでいるときハックはガラガラ蛇が近くにきたので殺し、いたずら心で死骸をジムの毛布のすそに置いておきました。ところがいつのまにかその蛇の仲間が来ていて、ジムは踵(かかと)を噛まれてしまいました。蛇は死んだ仲間のところに来てとぐるを巻くのだそうです。噛まれた踵は腫れ上がり、ジムは蛇の毒を消すためにウイスキーをぐい飲みしたりしながら4日間苦しんで、ようやく回復しました。ハックもこりて、ジムの言うことを聞くことにしました。ジムによると、蛇のぬけがらに触るくらいなら、「新月を左の肩越しに千回見る」(これも縁起のわるいこと)方がまだましだそうです。

目指すケアロを通り過ぎてしまったことを知ったジムは、黒人には運が来ない、あの蛇のたたりはまだ終わっていないのだと嘆きながらも、"It ain't yo fault." (あなたのせいではない)とハックを慰めます。

こうなるとは暗くなるのを待ってカヌーで川をさかのぼり、機会を待つほかありません。ところが、そのカヌーもなくなってしまい、仕方なく、カヌーを買えそうなところに着くまで筏で漂っていくことになりました。二人は蒸気船に衝突して死にそうな目にあったり、旧家の血なまぐさい争いを目撃したり、二人連れの詐欺師につかまって仲間に引き込まれたりしながらも何とかその場を切り抜け、時々はぐれたりしながら旅を続けます。最後には思いがけずトム・ソーヤのもう一人のおばさんであるサリーおばさんの家に行き着きました。そこでもハックはトムになりすまして一騒動起しますが、やがてトムが現れ、ミス・ワトソンが死亡したこと、彼女はジムを売ろうとしたことを恥じて遺言でジムを自由にしたことを告げるのです。

それを聞いてハックは心から安心しました。彼はジムを自由にしてやろうと力を貸してきたものの、自分が世話になったダグラス夫人の奴隷を逃がすことにひどい罪悪感を持っていたのです。密告するべきではないのかと、いつも良心の呵責に苦しんでいたのです。

ハックの父親も死んだことがわかりました。サリーおばさんはハックを養子にしてきちんと育てようと申し出ますが、ハックはまた旅に出ることを考えています。自由であることが好きなハックは、きゅうくつな町にはとても住めそうにないからです。

